

## 秋本番 その4

校長便りもあとラスト100になりました。一つ一つが最後の一步一步となります。心して書いていきたいと思えます。

社会というフィールドの中で、このことはどういうことなんだろうとか、この仕組みはなぜできたのだろうとか、このお金はなぜ払わなければならないのだろうとか、当たり前前に思っていたことや何の問題も感じなかったことにふと心を止めて、構造的に把握し始めるとき、その成り立ちや歴史や人のかかわりなどを発見して、まったくこんなことにもこんな仕組みが関係しているんだというような発見があるならば、その人は、そのことを明らかにしていくことだけでも大きな収穫を得ることは間違いありません。

つまり、ある課題を発見しその課題の克服のために心を砕く体験が、すべての学問の始まりだろうし、すべてのビジネスやすべての仕事の始まりなのだろうと考えるのです。

そのk十に心を砕く体験があるだけで、人や社会にコミットメントするベクトルが持てるのです。ベクトルとは、力の方向と大きさのことです。自分の向かう方向と力の大きさを持ち合わせることで、生きる力になると考えます。

課題を発見する力のポイントは、私の思うところ以下の5つです。

- 1 人の話をうのみにしない。
- 2 既存の価値観を疑う。
- 3 素朴な疑問を楽しむ。
- 4 時間を惜しまない。
- 5 結果にとらわれない。

ともすれば、効率と対費用効果という桎梏の中で、その縛りから飛び出して、自分だけのルールをもって、自分の頭でいろいろ考えることができるようになると、とても世界が開かれるのです。

子ども時代に合った、「どうして」病や「いやだ」病は、いつの間にか大人の論理の中で握りつぶいされていきましたが、そんな性格を持っていたという子供は、実は、大きなベクトルを体内の中に隠し持っていると考えて差し支えありません。

「もう一度」その力を思い起こして、「もう二度と」その力を封じ込めないことが、大きなばねになって、次のノーベル賞へ生徒をはばたかせていくと考えます。

「公立」と「今のところ対費用効果なし」という素質を生かし、あるがままの田舎の生徒の良さを生かしていくことが、きっと、本当の生き残る道になると考えますが、いかがでしょうか。